



The Japanese Association  
of Organic Geochemists

# Newsletter

## Organic Geochemistry 68

目次

Jul. 2, 2018

**Message** 2

---

「日本有機地球化学会」の法人化を目前にして

鈴木徳行

日本有機地球化学会の学会法人化について

将来計画委員会

**Invitation** 5

---

第 36 回有機地球化学シンポジウム (2018 年品川シンポジウム) ファーストサーキュラー

山中寿朗

**People** 8

---

～研究者の道を目指して～

浦井暖史

**Information** 12

---

日本有機地球化学会 2018 年 年会費のお支払いについて

**Announcement** 13

---

ROG34 巻へ論文を投稿しましょう！！

編集後記 14

---

## 「日本有機地球化学会」の法人化を目前にして

2018・2019 年度会長 鈴木徳行

2018・2019 年度は、本学会の法人化を実現し新たな一步を踏み出す節目の年になりそうです。本学会会長としてこれまで以上に精一杯努力し、しっかりした基盤を構築したいと願っていますので、皆様、どうぞよろしくご協力下さいませようをお願いいたします。

10 年ほど前に公益法人の改革に関係した新しい法律が整備され、学会組織は比較的容易に法人格を得ることができるようになりました。法人格を得ることによって、学会そのものが代表者として活動することが可能になります。学会の認知度や透明性が高まるので、学会の存在意義や公益性をしっかりと示すことができます。このような学会組織で活動する会員のステータスもこれまで以上に高まります。日本学術会議は本学会のような協力学術研究団体に法人格を得ることを推奨しています。そのようなことから、2017 年度の本学会総会にて、本学会はできるだけ早い時期に法人格を取得すべきであると決議しました。現在、将来計画委員会（奈良岡委員長、奥井委員、三瓶委員）を中心に本学会の法人化を実現するべく鋭意努力しているところです。

日本社会は少子化に直面しています。64 歳以下の人口減少が 20 年ほど前から既に始まっており、今後も続きます。このような状況下においても、小規模な学会が法人格を得て、それをしっかりと維持できなければなりません。そうでなければ、これまで多様な学問や文化を生み育ててきた日本の土壌は消失してしまいます。本学会は一般社団法人となることを目指しており、それ相応の一時的、継続的な出費が伴います。このような財政的問題は、本学会の通常予算や基金の活用と学会誌 ROG の今後の在り方（冊子体廃止など）を検討することで解決できるのではないかと考えています。財政的な問題以外にも、学会所在地の確定、定款作成と登記申請、その後の法人運営などがありますが、これらは理事会を中心に会員一丸となってしっかり対応していくことで解決していかねばなりません。

本年度より、本学会では高野財務担当理事のリーダーシップのもと、会員管理、会費納入のオンライン化を開始しました。これによって会員管理や財務会計作業にともなう負担が減少し、会員自ら会費納入状況を容易に確認することができるようになっています。また、本学会では J-STAGE による会誌 ROG のオンライン公開や役員選挙のオンライン化を既に実施しています。現在、組織運営の合理化を実現できる多様な IT サービスが提供されていますので、今回の法人化に合わせてそれらを吟味し、積極的に活用して、作業上の負担や財政的な負担を減らすことを進めて行きたいと考えています。なお、特定のサーバーに過度に依存せず、情報化社会のリスク管理にもしっかりと配慮しなければなりません。

「有機地球化学談話会」の発足（1972 年）から数えると、有機地球化学会は 2022 年に 50 周年を迎えます。この間、本会の改組・運営に数多くの会員が携わり、ご尽力いただきました。本来であれば、もっと以前からあるべきだったと大変申し訳ない気持ちが伴うのですが、本学会でもシニア会員制度を早急に整えなければならないと考えています。すでに本会を去られた方々も含めて、シニアの皆さんと共に現代社会にふさわしい身近な学会組織として、今後も着実に発展し続けたいと願っています。会員の皆様のご理解とご協力なくして本学会の発展はあり得ませんので、今後ともどうぞよろしくご協力くださいますようお願いいたします。

# 日本有機地球化学会の学会法人化について

将来計画委員会：奈良岡、奥井、三瓶

昨年の高知での日本有機地球化学会総会において、学会法人化の検討を進めることが議決され、将来計画委員会を中心として、検討作業を進めてきました。法人化に際しては法人事務局、予算、総会（学会）の開催時期などの多くの解決すべき課題があります。会長等とも相談しながら、課題を解決するための対応案を考えてきました。

また、先日は電子メールを利用して、会員の皆様に会計年度および総会の開催時期に関するシンポジウム開催時期に関してご意見を伺いました。さらに、昨年度の総会に出席できなかった会員の皆様も含めて、再度法人化についてのご意見・コメントをいただきました。基本的に法人化を進めることに反対の意見はありませんでした。一方で、本学会は今まで総会における議決手続き（定足数や議決権など）が明確ではなく、学会法人化をどのように進めるかについての手続き上の問題もあります。さらに学会法人化がまだ会員の皆様によく周知されているとは言えず、作業進行の遅れの一因にもなっています。

現在まで将来計画委員会が進めてきた検討作業と課題、およびアンケート結果は以下のとおりです。

1. 昨年度の総会（2017年8月高知開催）以降の検討事項
  - 1) 法人のタイプを検討したが「公益社団法人」の審査はハードルが高い。税金支払い等が毎年度必要だが、「一般社団法人」を目指すこととした。
  - 2) 法人化の際に事務所を登記する必要がある、また事務所所在地を変更すると登記内容の変更が必要でコストが掛かるため、一定期間事務局を運営して頂ける所を探した。
  - 3) その結果、会員が多い北海道大学から引き受けても良いと手を挙げて頂いたため、事務局を現 国際石油開発帝石株式会社から移転することとした。法人化後は北海道大学が中心となって運営される。
  - 4) 法人化の際、学会所在地を北海道大学に置きたい旨、大学側にお問い合わせしたが断られている。札幌市内の学会代行センター等のバーチャルオフィスを利用するオプションもあるが、コストが掛かるため現在検討中である。
  - 5) コスト削減のため、法人化手続きは札幌在住の司法書士や行政書士に依頼した方が良かったため、現在契約先を選定中。選定後に規約案や登記書類作成等の実務作業に移る。
  - 6) 法人のタイプ、事務所所在地がほぼ決まったことから、法人化コストの再検討を行った。大体以下の通り。
    - i) 法人化コスト：30万円（今年度の承認予算額は45万円）。
    - ii) 年間維持コスト：7万円（税金、登記内容変更等）。バーチャルオフィスを利用する場合、さらに5万円必要。
  - 7) 維持コストは小さな金額ではなく（特にバーチャルオフィスを利用する場合）、当面繰越金（180万円）を切り崩すあるいは学会誌のデジタル化等によるコスト削減が必要となる。田口基金（145万円）の流用等もオプションとして考えなくてはならないが、その際には改めて会員に相談する。
  - 8) アンケート結果から総会の開催時期を8月とし、事業年度（会計年度）の開始を7月とする。
2. アンケート結果（21名の会員から回答）
  - 1) 年会の開催時期
    - i) 8月（例年通り）：12票；ii) 5～6月（連合大会内開催も含む）：4票；iii) 11～12月：2票；iv) 2～3月：2票；v) いつでも良い：1票
  - 2) 法人化に関してのご意見・コメント（自由記述）

- ・ 法人化に賛成。有機地球化学のコミュニティを、正規の法人にすることは、これからこの分野で研究を行いたい、と考える次世代の研究者にとって、安心して参加できる要素の1つになる。
- ・ 会員への負担等の問題はあるかと思いますが、メリット（預金口座の開設など）を考慮する限り、法人化は妥当。
- ・ 法人化は賛成。他方、法人化されたら、これまでの本会の良さでもあり不足点でもある、同好会/同窓会的な特色は大きく変えていく必要がある。
- ・ 法人化は、避けられない。学会所在地は、コストとの兼ね合い。事務局に多大な負担がかからないことを第一に検討の必要あり。
- ・ 法人化は進行せざるを得ない。初期投資は後の進行が楽になるようにできるかぎり許容。維持コストは財産切り崩しやむなし。
- ・ 学会予算で間に合う範囲で、担当の方々の手間がかからないような形が良い。事務局を外に置くにしても、実際の事務局担当者と離れると難しい。
- ・ 総会員数が緩やかな減少傾向にある中、法人化コストが学会運営に及ぼす大きな影響が不安。新規会員の増加ため、人目に付きやすい連合大会で年会を開催し、色々な面で年会参加の敷居を下げるのが重要か。
- ・ 法人化後の事務局負担がどの程度なのか情報が欲しい。今以上の負担増はあまり好ましくない。場合によっては、日本地球惑星科学連合の団体会員等に登録した上で、社会的認知度の向上を図る。
- ・ 本格的な学会を目指すならば、法人化は必要。
- ・ 法人化するには、法人に相応しい組織であることが重要。定款を作る時には、総会の定足数や決議方法について記載するはずですが、現在の有機地球化学会の会則にはない。法人化という重要な議案を多くの会員に周知することなく、参加者の少なかった高知大会の総会で決定したことは、感心しない。法人化後の定款に合う形で、できることから会則の変更をすべき。総会の定足数や委任状の提出、委任状を含む参加者の過半数での決議などは必要。昨年の選挙も、公示やメールでの周知などは選挙規則通りには行われていなかった。法人化後はこれらも事業監査の対象となる。法人化後の対応では急に高いハードルを越えることになり、2-3年はバタバタする。ソフトランディングできるように、早めの対応が必要。

### 3. 法人化における今後の対応

昨年の総会で将来計画委員会から提案した学会法人化のロードマップでは今年度の総会(東京海洋大学)で法人設立を決議する予定でしたが、それを変更し、今年度の総会において、さらに法人化にむけての議論をかさねた上で作業を進めていくことにします。具体的には以下の予定を考えています。

- ・ 2018年8月：総会で法人化作業の現状報告および議論（事務所所在地および予算等）  
会則の改訂（総会の定足数や決議方法等を追加）
- ・ 2018年9月～2018年12月：定款案作成
- ・ 2019年1～5月：会員からの意見を集約  
- 定款案をニューズレター・ホームページで公開し、必要あれば定款案を修正
- ・ 2019年6月：公証役場で定款の認証を受ける
- ・ 2019年8月：運営委員会を経て、総会で法人設立を決議。  
- 定款および理事についても承認を得る
- ・ 2019年9月：事務所所在地で法人の登記を行う。  
- 法人化後初年度の事業・会計年度は2020年6月末日まで

以上

## *Invitation*

第 36 回有機地球化学シンポジウムは、東京での開催です！

---

### 第 36 回有機地球化学シンポジウム

(2018 年品川シンポジウム) ファーストサーキュラー

代表世話人：山中寿朗（東京海洋大学）

会員の皆様

盛夏の候、会員の皆様には益々御清栄の事とお喜び申し上げます。第 36 回有機地球化学シンポジウムは東京海洋大学が世話人となり、8 月 29 日(水)～8 月 31 日(金)に東京海洋大学品川キャンパスを会場として開催いたします。

東京海洋大学は 2017 年より新たに「海洋資源環境学部」が設置され、海底資源に関する教育・研究が加わりました。また、海洋大学は国立極地研究所と長らく連携協力協定を結んでおり、しばしば、南極海へ練習船を派遣しております。これらのことから、本年度のシンポジウムでは、海底の資源やその開発に関連した研究(石油やメタンハイドレートを含む天然ガスに関する事、またその開発に絡む環境影響評価等につつわるもの)、もしくは、南極周回流などに端を発する海洋の鉛直循環と関連した気候変動などに関する研究の発表を特に歓迎致します。多くの皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

なお、2018 年品川シンポジウムのホームページを開設いたしました(<http://www.ogeochem.jp/shinagawa/index.html>)。最新の情報はホームページでご確認ください。

#### 1. 日程

8 月 29 日(水)：理事会

8 月 30 日(木)：講演会、ポスター発表、総会および懇親会

8 月 31 日(金)：講演会

#### 2. 会場

理事会：東京海洋大学(品川キャンパス)9号館2階会議室(203室)

講演会、総会、ポスター発表：東京海洋大学(品川キャンパス)白鷹館2階多目的スペース

懇親会：(品川駅周辺予定)

東京海洋大学(品川キャンパス)港区港南4-5-7

(アクセス情報 <https://www.kaiyodai.ac.jp/overview/announcement/access/shinagawa.html>)

#### 3. 開催までのスケジュール

6 月 11 日(月) 講演・参加・懇親会の申込受付開始

7 月 20 日(金) 講演・参加・懇親会の申込〆切

7 月 31 日(火) セカンドサーキュラー(講演スケジュール等発表)

8 月 10 日(金) 講演要旨〆切、参加費・懇親会費振込〆切

#### 4. 参加・講演・懇親会の申込(登録)

上記の申込日までに登録をお願い致します。詳細はホームページに掲載致しますのでそちらを確認下さい。

## 5. 問い合わせ先

山中寿朗 (YAMANAKA, Toshiro)  
〒108-8477 東京都港区港南 4-5-7  
東京海洋大学 8号館 204室  
電話：03-5463-0600  
E-mail: t.yamanaka@kaiyodai.ac.jp

## 6. 宿泊

宿泊は各自でご予約下さい。近年、都内のホテルはかなり早めに予約しないと空きが無いようです。ご注意下さい。

## 7. 発表形態

口頭とポスターで行います。

1) 口頭発表時間は1件あたり質疑応答も含め15分を予定しています(発表件数によっては発表時間に変更になることもありますので、セカンドサーキュラーでご確認ください)。口頭発表では、液晶プロジェクターを使用します。USBメモリ等でご持参いただき講演当日の朝・休憩時間・昼休み等に会場のPC(Windows 1台、Mac 1台)にコピーして下さい。ご自分のPCを使用ご希望の方は事前にご相談ください。

2) ポスター発表は、ボードサイズ(縦180cm×横90cm)に収まるようなサイズでご準備下さい。ボードに貼れるものであればどのような形でも結構です。

2018年度も学生参加者には「最優秀発表賞」を設けて、賞状・副賞等を進呈する予定です。

なお、会場のスペースの関係上、発表形態の変更をお願いさせていただくこともありますので、お含みおき下さい。

## 8. 講演要旨

口頭発表、ポスター発表とも1件につきA4版1ページのPDFファイルで作成してください。原則として電子メール添付でsympo2018@ogeochem.jpへご送付ください。メールのタイトルに【品川シンポ要旨】と明記してください。様式は下記のとおりです。過去のシンポジウム要旨集を参考にしてください。

余白：上下30mm、左右20mm程度、行数36行程度、文字の大きさ11ポイント程度、1-2行目はタイトルと発表者氏名(センタリング、発表者の氏名の前に○、連名は・で区切り、所属は名前の後にカッコ書)、3-4行目は英文タイトル・氏名・所属を記入。

## 9. 参加費・懇親会費

オンラインによる事前のお支払いをお願いする予定です。以下の金額は予定であり、正式にはセカンドサーキュラーにてご案内致します。

- ・参加費(講演要旨含)：正会員 4,000円、学生会員 2,000円(非会員：一般 5,000円、学生 3,000円)
- ・懇親会費：一般 6,000円、学生 4,000円(予定)

## 10. 品川シンポジウム実行委員会

山中寿朗・鶴 哲郎(東京海洋大学)

11. その他シンポジウム中の企画・会合や企業展示等をご希望の方は世話人または本学会事務局までご連絡ください。

以上



会場となる白鷹館の概観



品川キャンパス内のポンドにつながる  
練習船「青鷹丸」と「ひよどり」

## People

今回は、横須賀の海洋研究開発機構で活躍する浦井さんに寄稿して頂きました。

### ～研究者の道を目指して～

浦井暖史（信州大学大学院）

信州大学大学院博士課程 1 年の浦井暖史です。現在は海洋研究開発機構 (JAMSTEC) の生物地球化学研究分野で研究生として横須賀に常駐しています。今回、産業技術総合研究所の金子雅紀主任研究員より本稿の執筆の機会を頂きました。この依頼を受けた時、学振 DC の申請書作成の真っ最中で、「自分の思いを自由に書きたい!」と思い、すぐに快諾しました。

せっかく頂いた機会ですので、まずは 6 年間お世話になっている有機地球化学会の皆様をはじめ、今までお世話になった方々に感謝を表したいと思います。特に学部・修士で有機地球化学の基礎を教えて頂き、退官された今でも温かくご指導して下さいる福島和夫大先生、今後の将来について悩んでいた時、親身に相談に乗って頂き、研究者の道に戻る決意を後押しして頂いた北海道大学低温研の力石嘉人教授、信州大学の朴虎東教授、そして素性の分からない私を快く受け入れて頂いた JAMSTEC の大河内直彦分野長、高野淑識主任研究員には、本当に感謝してもしきれない思いです。改めて、ここに感謝申し上げます。

実は修士卒業後 3 年半ほど、民間企業に勤めていましたが、思うところあって再び有機地球化学の世界に戻って参りました。今回は私が博士課程に進学するまでの分岐点や心情についてお話したいと思います。

昔から漠然と“化学”に憧れていた私は、“センター試験の点数”という運命に導かれ、信州大学理学部物質循環学科へ入学し、これまた運命に導かれ、“化学”と名のついた福島先生の研究室に所属するところから、私の有機地球化学の道が始まります。

学部生から修士課程までは溶存有機物 (DOM) 中のステロールの動態について研究していました。とは言っても、学部時代は「研究する」というよりも「勉強すること」に必死で、大学院入試もあわや不合格になると思っていました。それほど出来の悪い学生でしたが、福島先生の温かい指導のおかげで、無事に修士課程に進学することが出来ました。修士では DOM 以外にもプランクトン、懸濁態有機物 (POM) や高分子量溶存有機物 (HMW-DOM) の回収も行いました。福島研は別名「旅行研究室」と呼ばれるほど、日本各地でサンプリングをしていましたが、私も例に漏れず、長野県の本崎湖、諏訪湖、福井県の三方五湖、さらには鹿児島県の貝池、海鼠池など、自分のサンプリングではないのに、機材で一杯となった車に学生 3 人で、片道 20 時間かけて移動した事もありました。

これほど苦勞して採取した試料ですが、限外ろ過の最中にチューブが破裂したり、濃縮液をこぼしたりと、皆さんもご経験のある通過儀礼を受けながら、何とかデータ

を出すことができました。修士課程では学部時代の反省を生かし、真面目に研究に取り組んだ結果、2013年にはIMOGに参加するまでに成長しました。私にとって初めての国際学会で、福島先生と2人で参加することもあり、行きの飛行機の中から緊張していました。ところが、マドリッド空港に到着後に乗継用のホテルが取れていない事が発覚し、翌日には乗り継ぎに失敗して空港で10時間待機した挙句、テネリフェ島に到着した時にはアイスブレイクが終了しているというまさかの事態に見舞われました。こうして出鼻を挫かれたものの、いざ学会が始まると、すべてが新鮮で刺激的な内容ばかりで、ひたすら感動していた記憶しか残っていないほど、存分に楽しみました。唯一心残りだったのが、英語が絶望的に苦手だったため、ポスター発表などでは積極的に議論することができませんでした。これ以降、多少は英語を克服しようと努力していますが、現在に至るまで苦手意識は健在です。

さて、国際学会という大仕事を終え、残すは修士論文を提出するだけでしたが、この時に1度目の分岐点を迎えます。IMOG前にはすでに内定を貰っており、100%就職するつもりでいました。ところが、国際学会の経験は「このまま博士課程に進む道もありなのでは？」と思わせるには十分過ぎるインパクトでした。どうしたものかとしばらく悩んでいましたが、皆様をご存知のように博士課程に進んだとしても研究者の道は非常に険しく、民間企業に就職するにも修士の方が有利な状況でした。加えて、大恩人である福島先生が退官されること、当時付き合っていた彼女（後の奥さん）と

の将来について等々を考えた末、この時は予定通り民間企業への就職を選択しました。

私が就職した会社は主に環境基準や排出基準に基づいた測定や、残留農薬試験などの農薬分析を行っていました。入社後には分析部門に配属され、学生時代に慣れ親しんだ有機溶媒抽出やGC-MSの知識がそのまま生かすことができました。もちろん、社会の荒波に揉まれることも多々ありましたが、入社2年目には奥さんと結婚し、それなりに充実した日々を過ごしていました。

しかし、実は私には「修士研究の論文化」という宿題が残っていました。修士研究ではJAMSTECの力石博士（当時）にもお力を借りており、卒業前から論文化について協議していました。卒業後の入社1年目では、帰宅後に論文を書く余裕もあり、卒業後1年以内に投稿することができました。が、返ってきた結果は“REJECT”でした。当時は初投稿ということもあり、地味にショックを受けていましたが、次の投稿に向けて修正することになりました。しかしながら、入社2年目以降は仕事量の増加と反比例するように、遅々として進まないまま2年近くが経過してしまいました。

そして2度目の分岐点が訪れます。入社3年目の年度末に、分析部門から営業部門への移動が決まり、分析業務から離れることになりました。移動の際、社長から「君は分析だけではなく、これからは経営面に携わりながら会社を支えてほしい」と、それとなく（主観も入っていると思いますが）出世コースに乗るような事を言われました。すると、学生時代に抱いていた気持ちを出し、「このまま会社にいれば、それなりのポジションで安定した収入が得られる

(可能性が高い)が、長いようで短い人生を考えた時、やっぱり昔からの夢だった研究者の道を目指すべきではないか」と毎日考えるようになりました。もちろん、この決断は奥さんの了解が前提となるため、それとなく奥さんに相談したところ、「別にやりたい事やればいいじゃん」と、あっさり許可が出るという結果でした。冒頭で名前こそ挙げませんでしたでしたが、奥さんにはぶつちぎりで一番感謝しています。その後、大恩人である福島先生、JAMSTEC から北大低温研へ移動された力石教授、現在の所属先である信州大の朴教授を訪問し、率直な思いを話しました。悩んでいる間、他にも多くの方に相談させてもらいましたが、全員が真剣に相談に乗ってくれた事、「君を全力で応援する」と言って貰えた事は本当に嬉しく、自分は本当に恵まれているという事を強く実感しました。この時は本当に悩みましたが、博士課程に進んだ今、人生で最も大切な時間だったと思います。

力石教授の助言と紹介を受けて、学生時代の憧れだった JAMSTEC を訪問した際は緊張してうまく話せませんでした。大河内分野長と高野主任研究員からも率直なアドバイスを貰いつつ、研究生として受け入れて貰えることになりました。その後は無事に退社し、半年ほど専業主夫の経験を積んだ上で、2018年4月より、信州大学大学院博士課程に籍を置き、JAMSTEC で研究生として再スタートを切り、今日に至ります。

さて、長々と書きましたが、少し博士研究についてお話を頂きます。博士研究ではこれまでのフィールドから離れて、地下深部のメタン生成について研究課題とし

ました。関東周辺に広がる南関東ガス田は国内最大規模のメタンガス田であり、現在も商業的に採掘されています。このガス田から採掘されるガスの99%以上がメタンで構成され、そのまま都市ガスとして利用されています。また、地下水には海水の約2000倍の濃度のヨウ素が存在しており、さらには修士研究で扱った DOM が豊富に含まれているという、“ラーメン全部のせ”のようなガス田を形成しています。これほど魅力的なフィールドですが、有機地球化学的な知見は限られており、ヨウ素と DOM とメタンの関係についても、未だ謎だらけです。そこで博士研究では、メタン、地下水、堆積物などを対象に、脂質分析などの基礎的な情報収集から、 $^{13}\text{C}$  や  $^{14}\text{C}$  を中心とした同位体比分析、さらにはメタン生成アーキアのバイオマーカーである補酵素 F430 を用いた地下生産量の定量的評価などを適用し、地下深部の有機地球化学的環境について解明を目指します。また、ヨウ素と DOM がメタン生成過程に与える影響についても、独自の仮説を元に検証を行い、これまで不明であったヨウ素と DOM の役割についても解明するべく、研究に取り組んでいます。これらの研究成果については、今後のシンポジウムで発表できればと考えていますので、皆様と議論を深められればと思います。

大学院修士課程に進学された方の中には、私と同じように、進学すべきか、就職すべきかで悩んできた(又は現在悩んでいる)方もいると思います。私の場合は幸運にも多くの方から助力を得て、博士課程に進むことができましたが、今回の私の決断が本当に正しかったかどうかは、10年後、20

年後に明らかになると思います。が、まずはこの判断が正しかったと言えるように、これからの3年間を悔いのないように努力して参りたいと思います。

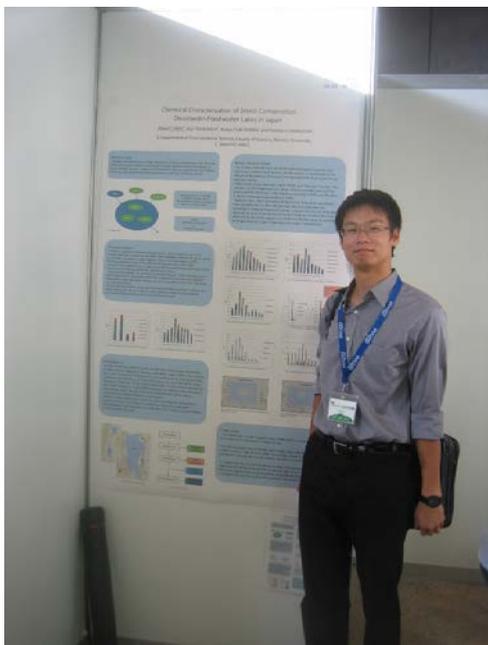


写真1. IMOG in Tenerife (2013)での筆者のポスター発表



写真2. JAMSTEC 生物地球化学研究分野のメンバー（何故か前列ど真ん中にいるのが筆者）

### 日本有機地球化学会 2018年 年会費のお支払いについて

日本有機地球化学会会則(2017年8月30日改定)により、2018年から正会員の年会費は、3,000円に変更されました。

皆様のご理解とご協力をよろしくお願い致します。

日本有機地球化学会 事務局  
(管理委託:会員管理サービス「シクミネット」)

\*\*\*\*\*  
正会員 年額 3,000円(2018年1月1日～)  
学生会員 年額 1,000円  
賛助会員 年額 1口 20,000円, 1口以上  
年会費支払い方法 シクミネットによるオンライン決済システム  
( <https://m6.members-support.jp/ogeochem/> )  
(メニュー → お支払い → 会費支払い)  
(コンビニ、ペイジー、クレジットカード)

#### 【ご案内】

- (1) 会員ID及び初期パスワードがご不明な場合は、事務局までお問い合わせください。
- (2) 新規会員の皆様へは、ご入会される際にお手続きの方法をご案内いたします。
- (3) 複数年の前払いをされている会員様で不足分が生じる場合には、差額徴収について、個別にご連絡します。
- (4) 2017年以前で未入金がある会員様へは、個別にご連絡します。

本件に関するお問い合わせは、  
日本有機地球化学会事務局  
office@ogeochem.jp  
まで、よろしくお願い致します。

\*\*\*\*\*

## Announcement

# 論文投稿数が減少しています。 ROG 34 巻へ論文を投稿しましょう！

Researches in Organic Geochemistry

編集委員長 沢田 健

ROG (Researches in Organic Geochemistry)は本学会の学会誌であり、有機地球化学およびそれに関連する分野の研究論文を掲載し、冊子の発行および web サイトに公開しております。ROG33 巻(Vol. 33) 1号(No. 1)は、昨年12月に発行され、論文 2 編、技術論文 1 編、議論(Discussion)1 編の計 4 編が掲載されました。表紙は、掲載された北海道大学 滝沢侑子博士の英文論文に関連したデザインになりました。2018 年巻である ROG34 巻(Vol. 34)は、1号(No. 1)は 2018 年 9 月頃、2号(No. 2)は 2018 年 12 月頃に web 公開する予定で進めております。冊子体は昨年同様に 12 月頃の発行を予定しております。一昨年から論文投稿数の減少が目立ってきているように感じられます。皆様からの積極的な論文投稿をお待ちしております。

ROG の論文のカテゴリーは、1) 論文(article)、2) 短報(short article)、3) 技術論文(technical paper)、4) 総説(review)、5) 議論(Discussion)です。新設した「議論(Discussion)」にも、ぜひ投稿ください。また、有機地球化学会シンポジウムで発表された内容や、博士論文・修士論文成果の発表なども歓迎いたします。詳

細は、ROG Vol.33 の巻末の投稿規定をご参照ください。また、上記の枠に入らない論文や企画でも、有機地球化学の発展に貢献し、学会員にとって有意義な論文・企画であれば、随時、編集委員会で検討を進めます。ROG は研究分野・領域のボトムアップをより重視した性格の雑誌であり、日本の有機地球化学の技術者・研究者が提案する挑戦的・草分け的なアイデアなどを積極的に掲載したいと考えております。様々なアイデア・企画を編集委員会にお問い合わせ下さい。その他、いろいろなご意見、ご要望、ご感想をお寄せください。

ご投稿・ご連絡は下記までお願いいたします。

PDF 添付ファイルによる電子投稿：

sawadak@mail.sci.hokudai.ac.jp

郵送：〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目  
北海道大学 大学院理学研究院 地球惑星科学部門

沢田 健 編集委員長宛

(TEL: 011-706-2733, FAX: 011-746-0394)

編集後記：

今号には学会の法人化に関する重要な記事が掲載されています。ぜひ会員の皆さまには目を通していただき、ご理解のほどよろしくお願いいたします。関係ありませんが、私も浦井さんと同じく企業で勤めたのちに大学院に入りなおしたクチです。(大)

今回は編集を担当させて頂きました。(高)

蝉の鳴く季節になって参りました。会員の皆様にシンポジウムでお会いできるのを楽しみにしています。(金)

発行責任者 日本有機地球化学会会長 鈴木 德行  
〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目  
北海道大学大学院 理学院 自然史科学専攻 地球惑星システム科学講座  
Phone&Fax: 011-706-2730

日本有機地球化学会事務局  
〒107-6332 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー  
国際石油開発帝石株式会社 技術本部 評価技術ユニット内  
事務局長 稲場 土誌典  
Phone: 03-5572-0263, Fax: 03-5572-0269  
e-mail: [office@ogeochem.jp](mailto:office@ogeochem.jp)  
ゆうちょ銀行口座 00110-7-76406 (名義人 日本有機地球化学会)

編集者 大場 康弘 (北海道大学低温科学研究所) 金子雅紀 (産業技術総合研究所) 高橋 聡 (東京大学大学院理学研究科)  
e-mail: [news@ogeochem.jp](mailto:news@ogeochem.jp)

有機地球化学会ニュースレターはホームページでもご覧になれます。  
アドレス：<http://www.ogeochem.jp/>